

東北ヘルプ ニュースレター

2025 年 イースター号

2025年3月11日 東日本大震災から14年を数えての祈り 1～2頁

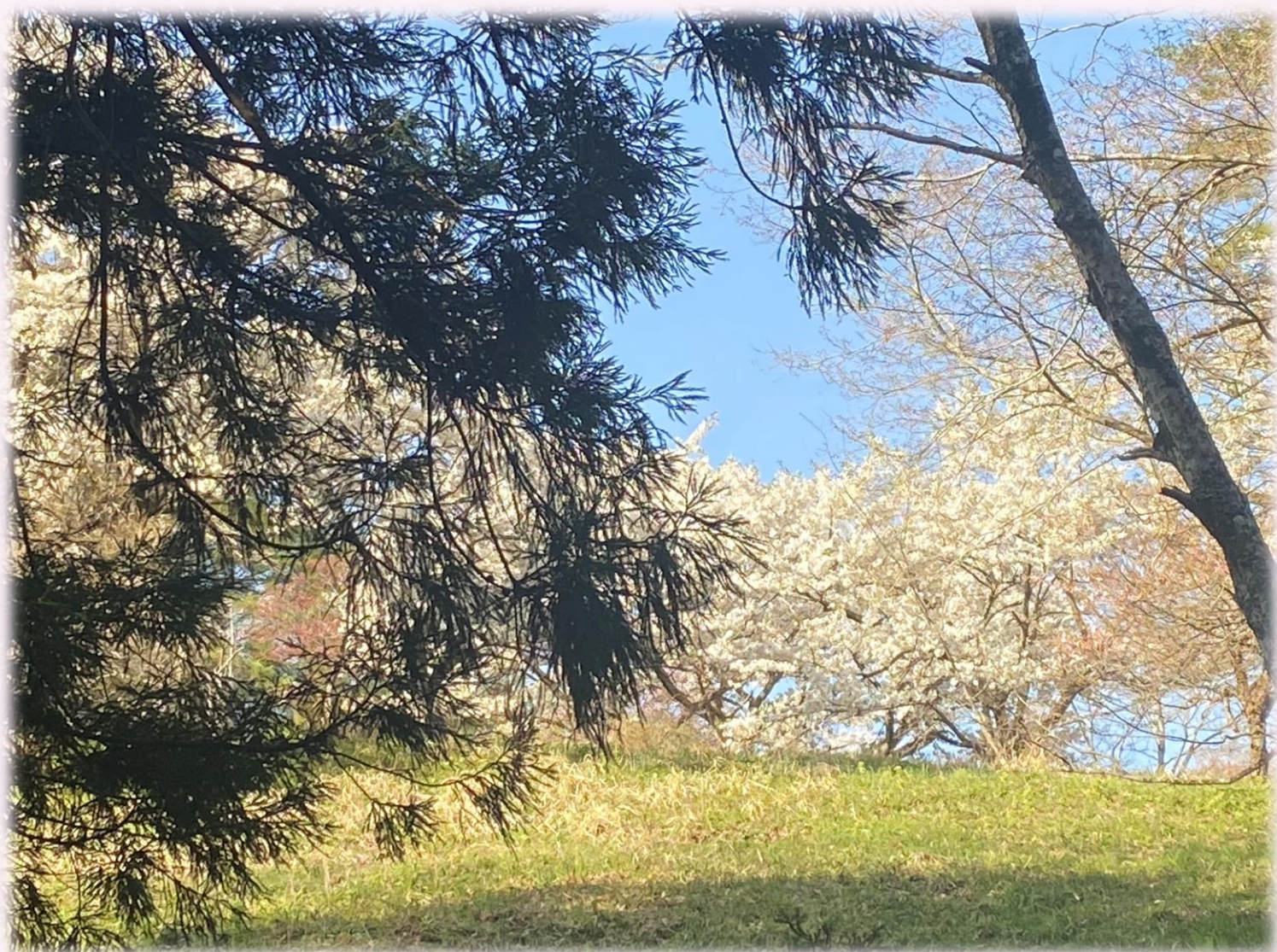
大船渡 山火事の現場から 3～8頁

「福島復興」とは、何か 9～17頁

【再掲】東北ヘルプ「短期保養支援」の面談結果について 18～19頁

会計報告 20頁

巻末言 21～22頁



2025年3月11日 東日本大震災から14年を数えての祈り

東北バプテスト連合 被災支援委員会の祈りに学びながら

聖書の神様。世界中で長く「主」と呼ばれてきた神様。全ての人をご自分の娘・息子と思いなしてくださる神様。今、私たちは集い、あなたに祈ります。あなたを「自分の親」と思って、祈ります。どうぞ、聞いてください。

東日本大震災から14年の時が経ちました。

私たちは今、14年前の大震災を思い出し、その痛みと悲しみを覚えます。そこに、確かに、あなたはいて下さいました。そして私たちは、この14年間の歩みを思い出します。今も悲しみや不安、分断の中にある一人ひとりを想起しています。どうぞ、痛む人々を慰め、私たちを励ましてください。ここまでの歩みに、イエス様が深い憐れみをもって寄り添って下さいました。そのことをいつも思い出し、「インマヌエル（頼るべき神は、私たちと共にある）」という聖名に込められた希望を、私たちが忘れることがありませんように。神さま、東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故の記憶は、日々、風化しているのです。どうぞ、私たちを憐み、守ってください。

阪神淡路大震災から30年経った今です。福島第一原発の原子力災害から30年後は、どうなっているのでしょうか。15年目の「被災後の日常」を生きる私たちは、低線量被ばくによる健康被害に、深い不安を覚え、それを押し殺して過ごしています。どうぞ、その御手を伸ばし、私たちをお守りください。原発事故の結果は甚大で広域に及んでいます。その収束を目指す私たちの前に、様々な課題が次々と立ち現れて来た、この14年間でした。コンクリートが剥落（はくらく）し鉄筋がむき出しになった足場の上に、激しく損傷した原子炉を載せて、なお水の浮力を得て今、倒壊せずに、経年劣化した福島原発はその姿を保っています。まさにその周辺で、廃炉作業が進められているのです。どうぞ、その安全が、今日、保たれますように。

大雨の降るたびに、放射性物質を大量に含んだ土砂が海へと出続けています。あなたがお預けくださった美しい太平洋を、私たちは汚染し続けています。そこに、「トリチウム」といった言葉を弄ぶ（もてあそぶ）政治のゲームが展開し、人々の心を荒ぶらせています。神様どうぞ、私たちを憐れんでください。

「復興」「帰還推進」という言葉が、空疎に踊りつつ、繁栄の儚い夢を振り撒いて（ふりまいて）います。そのきらびやかな輝きの中で、不安を口にすることが出来なくなっている人々がいるのです。神様。その声にならない声を聴いておられる神様。私

たちを憐れんでください。あなたは、その声のそばに立って、私たちを招き、隣人として生きるように励ましてください。そのあなたの御声を、しっかりと聞き取らせてください。そうして私たちが、あなたと共にいることが出来ますように。

昨年を思い出すだけでも、能登半島では地震に豪雨が重なりました。米国ではカルフォルニアの巨大な山火事がありました。そして今年、大船渡をはじめ日本各地で大規模森林火災が相次ぎ、そして、ミャンマーでは震災が起こったのです。そうした中で、私たちが住むこの土地で、東北電力女川原子力発電所が、昨年末に再稼働されました。今、聖書の言葉が思い出されます。「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなた方の愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように」という、パウロの祈りの言葉です。信仰の先達のこの願いを、どうぞ、豊かな憐みのうちに、聞き届けて下さい。その祈りを、私たちが自分のものとし、互いのために祈りあうことが出来ますように。

今、教会を助け強めて下さい。あらゆる被災地に、あなたの福音に生きる人々がいます。十字架の闇の中に、復活を信じて立ち上がる人がいます。それは、あなたからの希望の徴（しるし）です。そのお一人おひとりの必要が、今日、満たされますように。私たちは、新しい感染症の噂も聞いて、深く怯えています。さらに、世界の政治と経済の仕組みが激変している、その振動を感じているのです。しかし、私たちはつながっています。主イエスが「つながっているよ！」と励ましてくださいますから、その力強い御声に支えられ、無限に広がるつながりが、ここにあります。どうぞ、私たちに、祈る力を増し加えて下さい。教会・伝道所を励まし、地の塩として働く一人ひとりに仕える者としてくださいますように。そのために、隔ての壁を、壊し続けて下さい。あなたが先だって働かれています。その気配に触れ、共に働く栄誉を、教会・伝道所にお与えください。

疲れの中にある者に休息をお与えください。

すべての人の安全をお守りください。

すべての人に、主にある平安を満たしてください。

神さまのお取り仕切りが、天で見事に行われているその通り、
この傷む地上にも、隅々にまで丁寧に、行われますように。

十字架を通して光を示した主イエス・キリストの聖名によって祈ります。 アーメン

大船渡 山火事の現場から

少子高齢過疎の中で、「宣教と支援」を考える



2011 年の津波で甚大な被害を受けた岩手県大船渡市に、2025 年、大規模な山火事が起こりました。山火事は 2 月 26 日に発生し、2900 ヘクタール（東京ディズニーランドで約 60 個分）を焼き払い、3 月 7 日に鎮火しました。

公的な「鎮火宣言」が出された一か月後の 4 月 7 日、東北ヘルプの秋山善久理事と中澤竜生理事と共に、日本同盟基督教団グレイスハウス教会を訪ね、大船渡で長く支援活動が続けておられる齋藤満先生を訪問しました。

（聞き手：川上直哉）

中澤理事：はじめまして。2011 年に 40 メートルにも達する津波を受けたという大船渡の市内は、見事に復旧したように、今回、拝見しました。しかしそこに、巨大な山火事。被災され、新しい家を高台や山地にお建てになった皆さまは、本当に不安な日々を送られたことと思います。

齋藤先生：はい・・・では、まず、現地をご案内しましょう。

教会から自動車です 30 分ほど進むと、山火事の現場に到着します。途中、海沿いにある太平洋セメントの工場の巨大さが印象的でした。



齋藤先生：地域の人口減少は、他の東北各地と同じく、深刻です。大船渡市には「太平洋セメント」という大企業がありますが、今、セメント事業はオートメーションが進み、雇用を生み出しにくくなっています。そして、今回の山火事です。人気（ひとけ）が少なく、火事場泥棒が心配されています。太平洋セメントを抜けるところに、地域の方々が検問所を設けて、他県ナンバーの自動車に対しては、来訪の用向きなどを確認しているようです。

秋山理事：山の土が黒く燃えたのですね。

齋藤先生：はい。そして、地面の腐葉土を伝ったり、空を火の子が飛んだりして、あちこちで火事が「飛び火」しました。夜に赤々と燃える山の光景は、その匂いと共に、忘れられません。そして、ある家は全焼になり、でも、その隣は焼けなかったり・・・それで、地域の方々は、とても複雑な関係になってしまいました。さらに、「火元」の特定が難しく、疑心暗鬼からくる噂話も、皆さんの関係を悪くしています。

——瀬戸内海の方でも、大きな山火事がありました。その地域の方から聞いた話です。この数十年、輸入木材に押されて、山林の管理のコストが林業にとって大きな負担になっている。その中で、「谷」を持っている地主さんは、木々の枝などを谷間に集積して処理できるが、「谷」を持っていない地主さんは、山中で焼却せざるを得ない。消防署も「気を付けて下さい」と指導する他、できない。それで、どうしても、気候条件が悪い具合に重なると、山火事が起こってしまう・・・あるいはここにも、東北の少子高齢過疎の背景になっている中山間地の構造的な問題が、顔を出しているように思います。



齋藤先生：今回の火災では、4,500人が避難されました。でも、その大多数が親族・知人宅への避難になりました。地域社会が、ここではまだまだ、機能しています。そして、行政の対応は実に迅速で的確でした。私も、すぐに物資支援や募金を開始しましたが、今は状況を見守っている段階です。これから、仮設住宅が整備されて行きます。

教会にいつも来てくださる方の家の近くまで、火は迫っていました。いつも私はご自宅へ寄らせていただいていますから、心配したことでした。とりあえず、皆さん、ご無事でした。ほっとしました。

齋藤先生：では、教会へ戻りましょう。

中澤理事：美味しい珈琲を入れて下さり、ありがとうございます。豆を焙煎して、販売もされているんですね。

齋藤先生：はい。珈琲は、私の個人事業として行っています。とても小さな事業ですが、開始した当初から「黒字」になっていますことは、本当にありがたいことです。利益を教会の会計に奉げ、活動の一助となっています。



齋藤先生の珈琲は、お電話で注文いただけます。
電話番号 080-2806-0956（グレイスハウス教会 齋藤）
まで、どうぞ、お問い合わせください。

——もう、大船渡での活動が 10 年を越えましたね。

少し、ご自身の自己紹介をしていただけますでしょうか。

齋藤先生：私は、牧師の息子として、岡山で生まれました。1981 年生まれです。小学校で千葉県のパアンに引っ越ししました。その頃、キリスト教信仰を勧められても断っていました。中学校を卒業して、働くことにしたのですが、親に説得されて高校へ行きました。それで、大学入学資格検定を受けて合格し、高校を中退して就職し、国内外を旅していました。

その後、牧師である父から洗礼を受け、祈りの中で TCU（東京基督教大学）に導かれ、日本国際飢餓対策機構（現 ハンガーゼロ）に就職し、カンボジアに派遣されました。いろいろな経験を重ね、帰国して翌年が 2011 年、つまり、震災の年でした。



秋山理事：そして、神学校を卒業されてから、日本同盟基督教団、つまり私の教団から派遣される形で、大船渡に来てくださいました。ご一緒に東北の宣教に携われていることを、ずっと、頼もしく感謝していました。

齋藤先生：実は「被災地へ」という呼びかけを頂き、真剣に祈り、最初は、断りました。海外で「支援と宣教が逸脱した形で混在している」現場を見てきました。それは、とても心痛む現実でした。実際に、目の前で、子どもが傷つき、痛んでいたのです。そういうことが印象に残っていた。でも、妻と一緒に祈っていた時、イエスさまからの強い呼びかけを、直接聞いたような体験をしました。その時、妻も同じ体験をした、と言いました。もう、行くしかない、そう思ったのです。

秋山理事：おとうさまと、この教会の開所式で、ご一緒しました。「信じられない」と喜んでおられたことが印象的でした。教団の委員会では、経歴がユニークで、特別に神様に選ばれたのではないかと、まさにこの現場にぴったりだと語り合ったことを覚えています。そして、赴任してくださって、10年になりました。今日また、一所懸命やっておられることを見せていただき、感激しました。「私たち同盟教団は、支援と福音宣教を、どう結び付けるのか」と問われた中で、岩手県宮古市への支援活動から始まり、導かれるようにして、ここ・大船渡にたどり着いた。2020年までの5年間は借家で活動を進め、大家さんの御都合で、一年半「流浪」して、土地を購入して、今に至りましたね。ここまでの苦勞、特にお連れ合い様の苦勞を思います。「いつもお客様が来る」というプレッシャーが、ご家族にあったはずですが、プライベートは無くなる。申し訳なかったと思っています。文句も言わずに、本当によくやってくださいました。

齋藤先生：ありがとうございます。年間160名くらい、国内外のボランティアが教会に泊まってくださいました。お風呂もトイレもキッチンも、私たち家族と共にしていただきました。そのつながりを大切にして、今でも、同じように、国内外からお客様が来てくださいます。人口減少の大船渡市です。交流人口を維持・増加させ、いつか、定住してくださる方もそこから出てくると、そう期待しています。ここで、地域の人々とふれあい、支援活動を通じて「共に生きる」体験をする。そうして、お越しになった方々が、少し変わった自分を発見して、お帰りになる。その体験と感動を、帰国された後、教会などで分かち合ってください。その証言を聞いて、また新しい方々が、期待を胸に、大船渡に・グレイスハウス教会にお越しになる。その循環が、ずっと、続いています。地域の方々が私を受け入れて下さり、溶け込ませていただいて、「御用聞き」のようなことをさせて下さる。そのおかげです。それが、何よりも有難く思っています。

中澤理事：「支援と宣教」ということを巡っては、僕も、齋藤先生と同じことを悩んでいました。もちろん「自分で」教会に来てくれる方々を、私たちは大歓迎します。でも「教会に行かなければ、だめだよ」という話をすれば、誰も寄り付かなくなる。そして、そうした「厚かましい言葉」だけが、地域に広がっていくのです。その結果、本当に大切な話は聞いてもらえなくなる。そのことで、悩んだりしてきたのです。それで「宣教とは何か」ということを、東北ヘルプの仲間とずっと話し合い、学び直し続けています。



「焦って愚かなことをすると、宣教は百年遅れる」と、ある学者が本に書いていたそうですね。私も、全く同意します。私たちは、教会観を構築し直すことで、きっと、閉塞感を脱することが出来ると思います。齋藤先生は、教会に引きこもり・引き寄せられるのではなく、人々の間に出ていって、人間関係を作り、信頼関係を構築しておられます。そしてその中で、教会にも、機会があればお誘いをする。でも、中心にあることは「むしろ、出て行く」ということなのでしょう。

私は「宣証」という言葉を大切に使い、育てています。「宣教」という「教えて、押し付けて、改心させる」ということをやめたい、やめなければ、と思っています。そうではなくて、現場に立って、神様の愛の証（あかし）を示し続ける。

今日、被災現場で、年配者の方が、齋藤先生に深く心を許している様子を拝見しました。大船渡での10年のお付き合いが続いていると、感動しました。これからの課題は、やはり、高齢社会の「先」ですね。年配者ばかりのコミュニティーです。これから、関係する方々の数は減るでしょう。数少ない「若い人」に、どうしたら、よい関係を作れるか。難しい課題です。それを齋藤先生おひとりで担うことは、たいへんです。

齋藤先生：そうですね。私もそう思います。それで、海外からのボランティアチームを受け入れ続けているように思います。それはたいへんだけれど、その課題を克服するためにこそ、進めている。仮設住宅を支援して以来の流れで、今でも、私たちは災害公営住宅で楽しいイベントをさせていただいています。そうした活動の中で、長期間ご一緒くださるボランティアワーカーにも恵まれるのです。「一人でやる」ということではいけないと、心しています。



「多くの人を教会員として擁し、経済的に自立する」という教会の事例は、この周辺を広く見回してみても、まったく、存在していません。幼稚園等を経営して初めて成り立つか、教団などからの支援を受けて、持続しています。そうした中で、私たちは、この教会の活動を、どうやって継続するか。

あるいは、人がたくさん集まったとしても、それが「教会」足り得ていない」ということになれば、意味がない。逆に、迫害されても、続けられるような、そんな工夫を考えています。私たちは、イベントをたくさんします。でも、それは「人集め」ではない。教会がやらなければならないこととして、社会奉仕をしているつもりです。それはつまり、イエス様がしているとおりのことをしよう、という事なのです。



秋山理事：私は、今、仙台のぞみ教会で牧師をしています。その前任地は、飛騨の山のなかでした。「教会が設立されてから76年かかって、ついに経済的に自立した」という歴史を持つ教会でした。その教会が、今、仙台の私の教会などを献金で支えて下さっています。そうしたことは、日本でも起こり得る。不可能ではない。ただ、時間がかかるということだと思います。「教会の大きさ」を測ることなく、どうぞこのまま、続けて下さればうれしく思います。

中澤理事：齋藤先生は「普段、教会の外に出ている方が、ずっと多い」ということでした。地域ごとに、有力な方との関係が生まれて、そこで、協力を頂ける、ということも起こりますでしょう。昔は、お坊さんがそうした役割を担っていたようです。今、大船渡では、それを教会が担っている。素晴らしいことです。

齋藤先生：ただ、心配もあります。震災から10年以上たって、関係した人々が高齢化し、あるいは逝去している。その穴が、埋められないのです。ご指摘いただいた通りです。

中澤理事：そうなのです。そして、継続することが、どんどん難しくなる。私も同じ苦勞をしています。その課題に向かって、試行錯誤を繰り返しています。そして今回、ここでは、大火事になった。また、人口の流出が起こりますね。

齋藤先生：実は最近、「人の情も10年までか」ということも、感じているのです。震災をきっかけに生まれた「近すぎる関係」を、少し遠ざけたいと思う人も、現れ始めています。そうした中で、無理矢理に関係を緊密にし直すことは、とても難しい。ただ、私は「聖霊の働き」に注目しています。「人間の力ではなく、聖霊の力で」と、聖書から、期待しているのです。

中澤理事：そうですね。そのためにも、「ここに、居続ける」ことが、重要だね。

齋藤先生：宣教師は一般に、「いつまで居続けるか」という見極めを、10年単位くらいで、しているようです。実際に、「こんな死んだ町！」と言い捨てて東北を去る宣教師も、私は見てきました。確かに、人口減少は激しいのです。ここは「消えて行く街」かもしれない。でも、そうであればこそ、「ここ」で、きちんと福音を語る人になろうと思うのです。

——今日は、本当にありがとうございました。先生の働きが、被災地を想う多くの方々に届き、新しい希望を思い出させることになる気がします。またこれからも、どうぞよろしくお願いいたします。



「福島復興」とは、何か。

「福島イノベーションコースト構想」を考える

2011年3月11日の震災は、原発事故を引き起こしました。

多くの「お母さんたち」が、恐怖しました。たくさんの健康被害が確認され、報告されました（18～19ページに、東北ヘルプが聞き取りをした記録を再掲します）。

しかし、それらは、広く「なかったこと」にされています。

私たちは、ある古い歌を思い出していました。それは聖書に出てくる歌です。

嘆き悲しみ、いたく泣く声がラマで聞える。
ラケルがその子らのために嘆くのである。
子らがもはやいないので、
彼女はその子らのことで慰められるのを願わない。

これは、クリスマス物語の最終盤に起こる「嬰兒の大虐殺」の場面に挿入される旧約聖書の歌でした。私たちは、この歌を何度も思い出しながら、聞き取り調査を進めたのでした。

この歌には、続きがあります。それは回復と復興の知らせです。

あなたは泣く声をとどめ、
目から涙をながすことをやめよ。
あなたのわざに報いがある。
彼らは敵の地から帰ってくると主は言われる。
あなたの将来には希望があり、
あなたの子供たちは自分の国に帰ってくる・・・

嘆き悲しむ母親たちに、旧約聖書は、希望を語ります。それは、散らされた人々が故郷に復帰する、という希望です。

今、福島県浜通り（原発事故の現場付近）に、新たな「復興の拠点」が形成されつつあります。ロボット、IT、ワクチン、遺伝子、ドローン、水素・・・と、最新のテクノロジーの実験場として、原発事故の現場周辺を活用する。「福島イノベーションコースト」構想です。

私たちは、何度も、その工場建設の現場を見に行きました。しかし、そこに「希望」とは少し違う何かを感じました。違和感、という言葉では、どうにも捉え切れないような、「何か」です。

そうした中で、「はっぴーあいらんどネットワーク」の皆様から、一つのビデオを紹介いただきました（「はっぴーあいらんどネットワーク」の皆さんについては、2024年秋号のニュースレターでご紹介していました）。それは、「福島イノベーションコースト構想」の工事現場で感じ続けてきた「何か」を、言葉にしてくださる講演でした。



「ニュースレター」2024年秋号は、インターネットからご覧いただけます。右のQRコードを、どうぞ、ご利用ください。



その講演では、この「福島イノベーションコースト」という構想は、「ハンフォード・サイト」という米国の先行事例を引き写したものであることが、はっきりと示されていました。「ハンフォード・サイト」とは、米国の核兵器開発の総合計画である「マンハッタン計画」の重要な一部で、プルトニウムの抽出のために広範囲の核汚染を残した場所のことを指します。

私は、この事を、2025年の初頭、二回、東京と愛知での講演の機会を得まして、ご紹介しました。その反応は、やはり、「何か」うまく言えない、「何か」が微妙に行き違うような感じでした。

そこで、私たちは急遽オンラインで集まり、この事を話し合いました。その記録を、以下にお伝えします。

(2025年4月14日 川上直哉 記)

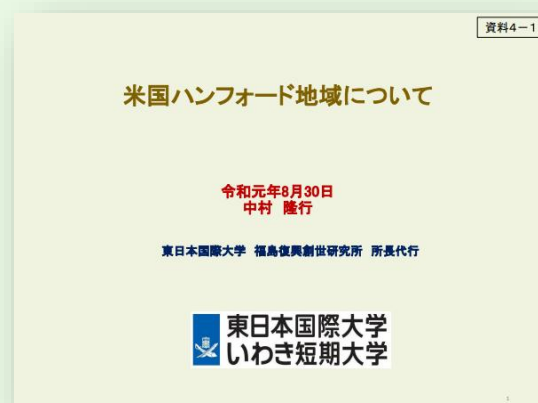


オンラインで集まったのは、次の4名です。

写真家の飛田晋秀さん(右上)、東北ヘルプ理事で「郡山食品放射能計測所・いのり」所長の木田恵嗣牧師(右下)、東北ヘルプ理事で「福島市食品放射能計測所・祈り」所長の大島博幸牧師(左下)、司会の川上(左上)

——はっぴーあいらんどネットワークの Youtube チャンネルで配信された講演について、みなさまは、どんな風に感じましたか？

木田理事：キーワードは「ハンフォード」でしたね。この言葉を、ネットで検索してみました。情報は、すぐに取り出せました。特に「米国ハンフォード地域について」と題されたスライド（令和元年8月30日 中村隆行 東日本国際大学 福島復興創世研究所 所長代行）は、簡潔にまとめられていて、よくわかるものでした。



https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-4/kenkyu-kyoten/material/20190830_shiryou4-1.pdf

第二次世界大戦の中で、「マンハッタン計画」と呼ばれる米国の核開発があった。その計画を進めるための中核となる場所が「ハンフォード・サイト」であった。多くの核実験が行われ、汚染がひどいことになった。そこで、その環境汚染への対応を新たな起点として、学術研究と新規産業の中心地となるように、政策的な誘導がなされた。その結果、スライドの言葉を借りれば「ハンフォード地域は、過去の放射能汚染地域から、現在では、全米でも有数の繁栄都市(全米で6番目の人口増加率: 2013年、全米312都市の中で最高の雇用上昇率: 2010年)となった。」それで、それを真似して、福島県の浜通りの、原発事故の現場付近に、そうしたモデルを持ち込んだ——それが「福島イノベーションコースト構想」なのだと、よくわかりました。

大島理事：私は、ビデオをざっと見ての感想を言います。原発建設と同じだな、という感覚を覚えました。また別の形で、福島が国策の中に踊らされていく。「被災」を覆い隠すために「研究」という名目が用いられている。こうしたことが、世論の中では「よいもの」として受け止められて行く。原発建設のときと、そっくりなのだろうと感じました。ですから、私たちの課題は、この「構想」を「どうやって・だれが検証するのか」という点を明らかにする事にある、と思いました。つまり「これから先の議論は、どうやって進められるのか？」と問うことです。

議論すべき点は、はっきりしています。つまり「復興ということが、こうした形でいいのか？」ということです。そうした声を挙げる必要があるし、挙げている人がいる。その人々に協力して行きたいと願っています。

——飛田さんは、まさに「そうした声を挙げて来た人」でした。


飛田晋秀さん：はい。ずいぶん前から、私は、浪江町の棚塩産業団地を見て来ました。イノベーション構想のスタート地点のような場所です。私は「これは完全に軍事産業のひとつになっていく」と直感し、今でも、ずっとそう思っています。



飛田さんについては、
2022年クリスマス号の「ニュースレター」に

「オンライン インタビュー
：2022 年 原発事故現場の今」

と題した記事を掲載しています。
右の QR コードから、
ご覧いただけます



「なぜこんなことをするか」と考えます。結局「福島原発を、早く終わったように見せる」という事なのではないか。そうした意向を感じていました。


最近、大熊町議の木幡さんと、この件で、意見交換をしてきたばかりです。「ハンフォード」というモデルがあることを知ることができて、このビデオに感謝しています。



木幡（こわだ）さんについては、
2024年イースター号の「ニュースレター」に

「元『原発強制避難地』を訪ねて
～大熊町・葛尾村・川内村 訪問」

と題した記事を掲載しています。
右の QR コードから、
ご覧いただけます



木田理事：私は、この事を考える際に、前置きなしに「軍事転用される」と言ってしまうことは、難しいのだろうと思います。それくらい、丁寧に・巧妙に、構想は設計されていると感じているのです。つまり、「イノベーションコースト構想」の全てが「軍事転用される」とは限らない。ただ、そのモデルがハンフォード、ということは、大事な手掛かりになります。

「福島浜通りトライデック」という団体があります。「トライデック」というのは「地元企業と教育研究機関・地方自治体を調整する機関」のことだそうです。まさに米国ワシントン州ハンフォードで実績を挙げているのが「トライデック」という機関で、その「福島浜通り版」が立ち上げられ、今、起動しています。

ホームページによると、「核汚染地区から全米有数の繁栄エリアに発展した」のがハンフォードで、そのカギになったのが「トライデック」であるということです。「福島浜通りトライデック」の役員は、学校法人理事長、参議院議員、東日本国際大学の教授、元復興大臣、等々、錚々たるものです。そうした企業と政治と地元の教育関係者が一致協力して、浜通りの事故汚染地区を、ハンフォードのような実利あるエリアに変えて、繁栄させようとしている。

私自身は、そういう発想について、「それでいいのか」と思われます。でも「潤えばいい」という人も、いるとは思いますが。それをどう考えたらいいのか。とても難しい。本当に、それは地元の人々の益になるのか。私は、「それでいいのか」と思われるのです。

大島先生がおっしゃった通り、過去の事例と、構造は全く変わらないように思います。つまり「原発建設」の時の事例です。「貧しい地域に富と繁栄をもたらす」——それが原発誘致だった。今回は「事故が起こったので、そのかわいそうな地域に発展と復興と繁栄をもたらす」という掛け声になっています。そして、「原発建設」の後、あの掛け声は、実際に、実現したのか。本当は、どうだったのか。「富と繁栄をもたらす」ことになったのか。現実には、荒廃した事故現場が広がったのです。では、今回は、どうか。はたして、この掛け声通りなのか。

ともかく、ハンフォードを学ばねばと思いました。本が一冊あるのです。『黙殺された被爆者の声：アメリカ・ハンフォード 正義を求めて戦った被告たち』というタイトルの本です。



ハンフォードの核実験で被害に遭った人々が、ひどい苦勞を押し付けられながら、しかしずっと「黙殺」された。その人々の苦闘をルポルタージュした力作です。そして、米国のハンフォードは発展し、繁栄した。しかし今、ハンフォードでは、まさにこの繁栄によって、苦闘した「黙殺された人々」自体が消されてしまって、いないだろうか。私たちも、おそらくそのように・・・と、そんな危機感を覚えています。それを真似するのか、と。痛みを忘れさせてくれる繁栄——実際の所は、それは、痛みを負った人々を見えなくする繁栄なのではないか。

大島理事：福島の実態と、国家の進み方とを、重ねて考えています。国家が国民を総動員させるとき「弱者に日の光を当てるのだ」ということを言うものです。今まで、いつも、ずっと、そうでした。私たちの身近な事例を挙げるなら「自衛隊員の募集」がその典型でしょう。もちろん、「福島イノベーションコースト構想」が直接にそうしたものとなっているわけではないのです。しかし、そうになっていく動きに見えるのです。結局「復興」という「きらびやかなもの」を見せながら、そうした方向へ進めて行く。その背後には、やはり、ある種の「企（たくら）み」があると思う。さて、私たちは、それを、どうやって扱うか。思案しています。

私は、福島市に来て7年になります。「元の生活に戻りたい」という被災者の声を、たくさん聞きました。でも、だれも「繁栄したい」とは言っていないのです。それが本当の被災者の姿のはずです。そのお一人おひとりの姿と、この構想が掲げる「復興のきらびやかさ」が、どう響きあっているのか。その不協和音の中で、黙らされている人も、たくさんいるのではないか。「元に戻りたい」という声を、私は聴いて行きたいと思います。

つい最近の夕方6時のテレビニュースで、福島市の開花宣言が取り扱われていました。ある写真家の人が、「一本桜の番付表」を作っている、ということが紹介されました。その方はインタビューに答えて「もう大丈夫、前と同じだ、と言いたい」と言っていたのです。それがニュースに流れる。「えっ？」と思わない、ニュースを作る人の感覚。それが、どこかで多くの人を傷つけていないか。議論を起し、声を黙殺させないようにしなければ。そのために、何ができるか。考えています。

飛田さん：私は、全国で講演をしています。その中で、「まだ14年しかたっていません」と言っているのです。実際の所「セシウムの半減期」について、皆さん、興味を持ってもらえない。でも、現実には広範囲に飛散した「セシウム137」は、300年かかって、やっと無くなる、という放射性物質です。だからでしょう、こうして「なかったことにする」。その上で、その放射線量の中で生きて病気になったら「自己責任」とされる。権力者は、とにかく、お金だけをばらまく。その姿勢には、憤りを感じるのです。

講演でもズバリ、私は言うのです。「それはだめだ」と。そうすると、バッシングされます。でも私は、実際の計測結果を見せるのです。そうすると、やはり、伝わります。

2011 年当時のこと・14 年前のことを語り、そこからの移り変わりを語る。そして、今の放射線量も伝えるのです。つまり「14 年前と大して変わらない」という放射能の現実を伝えています。

イノベーションコーストについても、時々、お話します。その反応は「驚いた」というものでした。とりたてて反対意見や異論はなかったと思います。そして東京新聞は、私の話を聞いて下さり、福島県浜通りの「軍事産業化」ということを取り上げてくれました。

——しかし、「福島イノベーションコースト」をはじめとして、移住者を募る政策は活発化していますね。多くの人々が、それを歓迎しているように見受けられます。

飛田さん：福島の放射能汚染地帯に移住してくださる方々への政策は、実に手厚いのです。でも、これから長い人生を生きる「若い人たち」は、移住の際、結局、お金のことだけ聞かされています。

福島県の被災地に入ると、仕事を始めるだけで 200 万円。子どもと一緒に移住すれば、さらに 100 万円。事業を興せば 400 万円。移住すると 400 万円。新築すると 500 万円。そうして、全部で 1000 万円もの補助のメニューが揃っています。

お金が蒔かれている。そして、すべて「自己責任」とされる。

原発事故の被災地に、子どもさんも、かなり来て移住しています。今、事故現場周辺に住む人の割合は、もともとの地元住民が 2 割、そして移住者 8 割となっているのです。結局、問題を「お金」で解決させようとしている。それでも、やはり、そこに勤めてくれる人数が、まったく足りていません。「箱モノ」と呼ばれる施設設備ばかりがどんどん建設されています。これからいよいよ、こうした「お金」で人を集めようとする動きは加速してくることでしょう。

木田理事：そして、巧妙、と言っているのかどうか、「イノベーションコースト構想に協力する福島浜通りトライデント」という形で、市民団体が活躍しているのです。政府でも、企業でもない、それは、地元の人々がやっている連絡会です。それが推し進める「イノベーションコースト構想」ということになっている。これで、ずいぶん、事柄は分かりにくくなります。はたして、その「市民団体」に、背後でお金を出しているのは、いったい、誰なのか。「市民の声」で展開している、という構図を作りたいのでしょうか。そして「民間のご意見」として、事柄が推進されている。私は、そうした中に、怖さを感じています。

——なるほど。最後に、大島先生と飛田さんから一言ずつ頂けますか。

大島理事：私たちが向きあっているのは、国家であり、経済であり・・・みんな「大きな何か」です。向こう側は、圧倒的な量と力。

だから、私たちは、どこに立っているか、と考えます。人々の隣人として、立っている。そこに生きている人たちと一緒に生きる。そのことに徹したいと思います。「オオカミ少年」と批判されることも、時に必要なのかもしれないと、覚悟しながら。実際、原発を作る時に、そうした姿勢から語られる声が黙殺され、この事故に至ったのです。

私たちは、ここに「軍事化」が覆い隠されていることを踏まえて、「心配だ」と語らなければならない。そのために、隣人に声をかけ続ける。今まで、無力さを感じながら、誰と一緒に生きるか、ということで、ずっと、心ある人たちが、少数であっても、やって来たのです。私たちも、証拠を示し続ける。だから、食品放射能計測所は、細々でも、続けて行かねばと思わされています。無力さを感じても、続ける。少数者の誇りを感じて、続ける。

右は「福島市食品放射能計測所」のり。
計測事業は、今もいわき市と郡山市と福島市で続いています。
東北ヘルプは、三つの計測所の連絡調整を担当しています。



飛田さん：放射能の問題が、まったく、話題にならなくなりました。でも、それはおかしい。なぜ、福島の被災地では、あんなに広範囲の避難が起こったのか。放射能が高いからでしょう。その事実そのものが、知らない間に打ち消されたようになっている。

オリンピックのために「アンダーコントロール」と語られたことが、やはり、大きなことだったと、今でも痛感しています。その前までは、「除染」が重視されていたのです。でも、今はもう、そうした雰囲気はなくなりました。そして、どんなにお金を積み上げても、やはり、人は戻ってこない。それは結局、放射能が高いからです。お年寄りも、戻るとは。でも、その「戻ったお年寄り」が「若い人は戻らな」と言っています。そのことが、まったく、一般に語られていません。

震災前、福島県の土壌の放射能は「41ベクレル/kg」くらいだったです。それが「8千ベクレル/kg」までは問題なし、と、されています。そのことを知ると、誰でも普通、「え、そうなの？」となる。そこが分岐点になる。「ここだって、国際的な基準からすれば、避難しなければならなかった」ということを、思い出すことが、とても大切です。

最後に、一つ、最近の私の体験をお伝えさせてください。

12月末に、私の知っている人が、福島第一原発から30キロ圏内の場所で、避難後に放置されて痛んでしまった住居を解体していた時のことです。そうやって、とにかく更地にして、除染するのです。しかし、その現場にいたゼネコンの人が、はっきり言ったそうです。「また、何年化したら、放射能の値は、元に戻りますよ」と。実際、そこにある土壌を測ると「9千ベクレル/kg」を超える放射能が確認されました。私はそこを定点観測しているのです。除染後、確かに、だんだん上がっている。

その近くには、週に数回来て、自分のもともと住んでいた土地で、家庭菜園を始めた人がいます。その人の作業している場所は、空間の放射線量で「5マイクロ Sv/h」ありました。当然、震災前であれば、あるいは、福島以外の地域であれば、大問題になって、すぐ避難すべき数値です。でも、それも知らされずに、週に何日もそこに来て、農作業をしている。そういう現実が、今、広がっている。それを「自己責任」としてしまふ風潮が、恐ろしい。

——「復興」を「繁栄」と言い換えて、そして、現実を見えなくする。そうして、人々が打ち捨てられて行く現実が広がる。そうした今であることを、とてもはっきりと感じました。まだまだ、考えて行かねばなりません。今日も、本当にありがとうございました。



東北ヘルプ

担当者: 川上直哉
作成: 2016年6月30日

「短期保養支援」の面談結果について

東北ヘルプは、合同メソジスト教会災害対策室(UMCOR)の資金をお預かりして、2016年6月までのプロジェクトとして、「短期保養」を支援しています。それは、

- イ) 放射能に不安を覚えている親御さんを対象に、
- ロ) 短期保養を行って子どもを守るために、
- ハ) 保養のための交通費を支援する。

・・・というものです。

この支援の大切なポイントは、支援の度に、毎回必ず、面談を行うことです。2016年6月30日現在、川上は721回の面談を行い、208世帯(大人444人、子ども436人)のお話を定期的にお伺いしてきました。回を重ねるうち、これは尋常ではないと、背筋を寒くする思いを強めました。その内容を数字で説明しますと、以下の通りとなります。

① 福島県内で2011年3月を過ぎた165世帯との面談の結果

(1) 87%の世帯で、健康に異常が確認されていました。

(2) 大人353名の内、以下の症状が確認されていました。

慢性的な空咳(10人)、甲状腺A2判定(8人)、甲状腺B判定(7人)、慢性的な皮膚疾患(7人)、慢性的な鼻血(6人)、慢性的な咳痰(6人)、慢性的なだるさ(6人)、慢性的な鼻炎(5人)、慢性的な発熱(5人)、声が出ない(4人)、甲状腺肥大(3人)、橋本病(3人)、扁桃腺肥大(2人)、流産(2人)、溶連菌感染症(1人)、子宮外妊娠(1人)、甲状腺C判定(1人)、胃腸炎(1人)、慢性的な体の痛み(1人)、甲状腺癌(1人)、視神経炎(1人)、慢性的な頭痛(10人)、糖尿病の悪化(1人)、白内障(1人)、こぶ(1人)、耳に膿がたまる(1人)、慢性的な貧血(1人)、慢性的な不整脈(2人)、慢性的な腰痛(1人)、歩けなくなる(1人)、肺がん(1人)、風邪が治らない(1人)、慢性的な下痢(1人)、リウマチ(1人)、毛穴から出血(1人)、中耳炎(1人)、副鼻腔炎(1人)、喘息(1人)、呼吸器が苦しい(1人)、膀胱炎(1人)、足が勝手にバタバタ動く(1人)、睡眠障害(1人)、大腸腫瘍(1人)、肝臓腫瘍(1人)、甲状腺腫瘍(1人)、手足の痺れ(1

人)、持病の悪化(1人)、慢性的に喉がイガイガする(1人)、死産(1人)

(3) 子ども150名の内、以下の症状が確認されていました。

慢性的な鼻血(82人)、甲状腺A2判定(68人)、慢性的な皮膚疾患(56人)、空咳・喘息(37人)、慢性的な鼻炎(23人)、慢性的な頭痛(16人)、慢性的な口内炎(15人)、慢性的な体力の低下(16人)、慢性的な発熱(13人)、慢性的な鼻炎(12人)、甲状腺B判定(5人)、慢性的な下痢(5人)、手足口病(5人)、肺炎(5人)、爪に異常(4人)、慢性的な蕁麻疹(6人)、慢性的な腹痛(3人)、慢性的な足の痛み(6人)、夜尿症(5人)、慢性的な限(5人)、慢性的な胃腸炎(4人)、慢性的な疲労感(3人)、慢性的な貧血(3人)、扁桃腺肥大(3人)、とびひ(5人)、中耳炎(3人)、リンゴ病(2人)、産まれてすぐ鼻水が詰まる(2人)、首の痛み・しこり(2人)、精巣の奇形(2人)、夜に眠れない(2人)、歯ぐきから出血が止まらない(2人)、ひどい爪噛み(2人)、胸が痛い(2人)、慢性的な気管支炎(2人)、マイコプラズマ(2人)、甲状腺機能低下症・橋本病(2人)、食欲減退(2人)、慢性的な咳痰(2人)、白血球内好中球数低下(2人)、慢性的な足の裏の痒み(1人)、副鼻腔炎(1人)、足の奇形(1人)、視力低下(1人)、赤血球不足(1人)、慢性的なのどの痛み(1人)、慢性的な徘徊(1人)、甲状腺肥大(1人)、白血病(1人)、慢性的な不整脈(1人)、結膜の剥離(1人)、まぶしがる(1人)、目がかゆい(1人)、低血糖で意識を失う(1人)、上あごに腫瘍(1人)、慢性的な血圧低下(1人)、身長が伸びず体重が減る(1人)、幻覚を見る(1人)、带状疱疹(1人)、声が出にくい(1人)、慢性的な目の痛み(1人)、寝つきが悪くなった(1人)、甲状腺がん(1人)、パセドウ病(1人)、髪の毛が生えてこない(1人)、心臓に穴が開いて生まれる(1人)、軽度肥満(1人)、手の震え(1人)、骨折(1人)、風邪をひきやすい(1人)、急性ストレス障害(1人)、保養先で黒い便(1人)、脇の下と太腿内側が赤く腫れる(1人)、キッシング病(1人)、血小板減少紫斑病(1人)、給食のキューイを嘔吐の後、顔が腫れあがってアレルギーに(1人)、慢性便秘(1人)、ものもらい(1人)、ERウイルス感染症(1人)、血行不良(1人)、慢性的に目がかゆい(1人)、慢性的に目が腫れる(1人)、熱性痙攣(1人)

2 関東地方（神奈川・東京・千葉・埼玉・栃木）と宮城県内で「2011年3月」を過ごした方々、43世帯との面談の結果

(1) 98%の世帯で、健康に異常が確認されていました。

(2) 大人84名の内、以下の症状が確認されていました。

慢性的な発熱（3人）、癌（3人）、慢性的に心臓のところが痛い（2人）、慢性的な体の痛み（2人）、慢性的な鼻血（2人）、慢性的な口内炎（2人）、慢性的な喉（2人）、耳管内炎症（2人）、甲状腺B判定（3人）、慢性的な鼻炎（2人）、慢性的な吐き気（2人）、慢性的な目まい（2人）、慢性的な不整脈（2人）、慢性的な頭痛（2人）、抜け毛（1人）、慢性的な空咳（1人）、橋本病（1人）、慢性的に内臓が痛む（2人）、不整出血と前置胎盤（1人）、鼻と目の痒み（1人）、目が痛い（1人）、皮膚疾患（1人）、尿からセシウム（1人）、何度も卒倒した（1人）、バセドウ病（1人）、甲状腺A2判定（3人）、甲状腺肥大（1人）、甲状腺癌（1人）、婦人科の病気（大量出血）（1人）、慢性的貧血（1人）治療用の服薬の副作用で恒常的な病となる（1人）、溶連菌によるリウマチ痛の入院（1人）、盲腸の腫れ（1名）

(3) 子ども101名の内、以下の症状が確認されていました。

甲状腺A2判定（22人）、恒常的な鼻血（23人）、とびひ（3人）、皮膚疾患（20人）、口内炎（10人）、恒常的な発熱（7人）、結膜炎（2人）、空咳・喘息（10人）、恒常的な頭痛（8人）、気管支炎（3人）、恒常的な喉（3人）、ぐったりと疲れる（5人）、尿からセシウム検出、（3人）、白血球内好中球数の低下（3人）、恒常的な鼻炎（4人）、恒常的な下痢（2人）、慢性的な痰（2人）、いつも目やにが出る（2人）、免疫不全で出生（2名）、心臓に穴が開いて生まれる（2人）、4歳になっても続く夜泣き（2名）、白血球の数値異常（2人）、体力の低下（1人）、甲状腺B判定（1人）、手足口病（1人）、肺炎（1人）、恒常的な足の痛み（1人）、身長が伸びず体重が減る（1人）、夜尿症（1人）、慢性的な目の痒み（1人）、低体重（1人）、雪焼けのような日焼け（1人）、带状疱疹（1人）、脱毛（1人）、後骨髄球検出（1人）、紫斑病（1人）、痙攣（2人）、虫垂炎（1人）、ヘルペス（1人）、口唇口蓋裂（1人）、慢性的な足の裏の痒み（1人）、リンパ節肥大（1人）、外遊びをすると水いぼができる（1人）、

※以上の資料を作成する際、お一人お一人の心痛を記録したメモ全てを見直しました。作業を続けるうちに、その現実、に、圧倒されました。何もできない、お見舞いと連帯の言葉をかけるばかりの自分を思いました。ただ、お話しくださった皆様が私と「ともだち」になってくださったこと。それだけが、救いだと思いました。以下に、面談の様子をご紹介します。なお、以下の事例にお

いて地域名と個人名は伏せております。どうして、伏せなければならぬのか。その点に、深い闇のような問題を感じます。

Aさん

（女性・2015年南関東の某日本基督教団教会で面談）

・現在、千葉県の都市で、自分と、今小学生3年生の二人暮らし。交通事故の後遺症を負っている。千葉県内湾岸地区で被災。その時、保育園に子どもはいた。テレビで、爆発を見て、チェーンメールが回ってきた。怪しかった。嘘だという友達もいた。妹から、子どものことを心配して、逃げるように勧められた。子どもが4月から学校に行くようになって、放射能博士のような人がいて、勉強が進んだ。クラスでは2家族だけ、危険を理解していた。

・子どもが空咳が止まらなくなり、病院も役に立たず、病気はわからなかった。身長は伸びず、体重は減り、咳をして吐くようになった。木下浩太氏の講演に参加し、そこで短期保養を勧められた。保養に行ったら、咳が止まった。皮膚に痒みも出ていたのだけれど、それも止まった。

・かゆみは、自分にも出ていた。それも、保養に出ると止まった。千葉に戻ると、再び繰り返す。最近、抜け毛が、ひどくなっている。震災後の秋には始まったものである。

・心なしか、保養に出て治まるおさまりが、鈍くなっているように感じる。今夏、稲毛の海に行ったら、目が痛くなった。岡山の海では、痛くなかった。自分の心電図は、異常を示している。この数日、心臓が痛くて、寝付けない。

・母子ともに、移住を希望している。しかし、震災後、家計を支えてくれた実の両親が病気になり、「移住」に強く反対している（思わず、と罵られる）。父親は、癌となり、母親は、めまいがひどく、バスにも乗れない状態となる。病院では原因不明とされる。自家菜園の野菜を食べ続けていたことが気になる。

郡山キリスト福音教会での面談。ほとんどの面談は教会で行われます。



会計報告

2024 年度も、無事に活動を進めることが出来ました。感謝に堪えません。

下の表は、東北ヘルプ3月理事会の報告資料から切り取ったものです。これをもって、会計報告とさせていただきます。

「コロナ」の騒動の中で、献金額は「みるみる」と減少しました。しかし、その減少率も「踏みとどまった」ように見えます。この間、支出の削減に努めました。それは、とても良い経験だったと思います。2023年度までには固定費を徹底的に削ることに成功し、2024年度は、一時的に「冬眠」するつもりで活動を徹底的に見直すことが出来ました。そして、そんな私たちの苦勞を知って下さり、励まし支えてくださる皆様がおられました。ただただ、心から感謝いたします。今年も、もう一層の支出削減に努めつつ、皆様とのコミュニケーションを豊かに維持し、東日本大震災被災地の現場、とりわけ津波と原子力災害の現場の風化に抗い続けたいと思います。

次のニュースレターは「6月」の総会の頃に発行予定です。6月には貸借対照表を作り上げられるはず、と、意気込んでおります。引き続き、どうぞ、支えられ歩み続けられますように、お祈りくだされば幸いです。

(2025 年 4 月 15 日 川上直哉 記)

■財務報告

- (1) 2024 年度は「500 万円」の予算として事業を行った。2024 年度は収支均衡となった。
(2) 現在、支出削減を進めている。「冬眠」によって「経常的な支出は月額 25 万円程度＝年間 300 万円程度」に抑える目標であった。それは達成されず、「月額 30 万円程度＝年間 360 万円」となった。
新年度は「あと 60 万円」の節減を目指す。(まずは書籍とニュースレターか)。
(3) 収入については、コロナを機に減少が続いていたが、その率は止まったように見える。

2024年度 [※]	献金件数	献金額	支出金額	2023年度 [※]	献金件数	献金額	支出金額		献金金額	前年 同期比
4月概算	40	¥433,250	¥692,012	4月	39	¥478,339	¥685,446	2019年度	8,615,373	
5月概算	16	¥200,692	¥298,225	5月	25	¥576,389	¥653,840	2020年度	9,332,281	108%
6月概算	27	¥653,788	¥329,629	6月	18	¥648,782	¥707,291	2021年度	7,207,253	77%
7月概算	15	¥276,000	¥203,570	7月	9	¥144,630	¥625,156	2022年度	6,573,685	91%
8月概算	16	¥165,310	¥270,436	8月	15	¥138,413	¥283,208	2023年度	5,540,876	84%
9月概算	6	¥121,000	¥317,287	9月	44	¥645,660	¥558,798	2024年度	5,406,146	98%
10月概算	53	¥504,558	¥537,153	10月	23	¥410,720	¥296,847			
11月概算	24	¥250,612	¥342,536	11月	16	¥191,000	¥291,053		献金件数	前年 同期比
12月概算	88	¥905,114	¥328,006	12月	109	¥921,300	¥284,950	2019年度	464	
1月概算	41	¥491,870	¥648,649	1月	44	¥485,800	¥736,589	2020年度	477	103%
2月概算	38	¥559,533	¥272,988	2月	42	¥439,243	¥523,979	2021年度	519	109%
3月概算	32	¥844,419	¥1,079,166	3月	28	¥460,600	¥312,764	2022年度	487	94%
	396	¥5,406,146	¥5,319,657	2023年度決算	412	¥5,540,876	¥5,959,921	2023年度	412	85%
前年同月比	96%	98%	89%	前年同月比	85%	84%	85%	2024年度	396	96%
				2025年 3月31日 現在の資産						
進捗率				通帳1	¥439,965		※これは ランドセル 献金 ↓			
日数	収入(献金のみ)		支出	通帳2	¥319,957					
100%	108%		106%	郵貯口座	¥7,952					
	(500万円の予算対比)			振込口座	¥282,268		実際の所持金			
				未払金	¥196,852					
				合計	¥853,290			¥533,333		

巻末言

「みちのく潮風トレイル」トレッキングのお誘い

「モータリゼーション」という言葉が生まれ、流行り、そして当たり前になって、もう長い時間が経ちました。私たちの社会は、自動車なしには成り立たなくなっています。

自動車に乗りますと、数キロの距離も「近い」ものとなります。それは、便利です。でも、それは、大切な何かを見落とすことになりそうです。

今、東北は、オオイヌノフグリやネモフィラが咲き誇っています。その小さな花園は、しかし、自動車で移動するとき、まったく見えなくなってしまう。でも、歩きますと、土手や野原一面に輝く花々の青さに、春の素晴らしさを知ることが出来る。不便の中で、大切なものを見出す。そんなことが、あるようです。



被災地は広いので、東北ヘルプの活動に、自動車は必須です。今回も仙台と石巻から、岩手県大船渡市まで「日帰り」で出張し、山火事の現場を拝見し、大船渡市内のグレイスハウス教会で齋藤満牧師のお話を伺いました。私たちは朝9時に石巻に集合して、夕方4時過ぎに石巻で解散していました。そして「福島イノベーション構想」という巨大な出来事と向き合うために、急遽、私たちは集まりました。集まったのは、宮城県石巻市の私と、福島県各地のお三方でした。それは「Zoom」というオンラインアプリケーションを用いた、インターネット上の会議として成立したことです。そのようにして、自動車と高速道路と光回線を用いて、私たちは距離を超え、時間を節約し、つながり合い、交わり、励まし合って学びを深めた。それは、すごいこと、感謝なことだと思います。

でも、それだけでは、見落とすものがある。そこで見落とされるものは、事柄全体の核心に触れるものかもしれない——とりわけ、被災地において、それは、真実だと思います。

今回、祈りの言葉を冒頭に掲載しました。これは、東北ヘルプが共催して行われた「2025年度 3.11 追悼と感謝の会」(主催 石巻広域ワイズメンズクラブ)の司式を川上が務めた際、祈った言葉でした。

祈りは、スピードと効率の埒外に成立します。「自動車で走る」のではなく、「黙々と歩く」ようにして、祈りは練られます。そして祈りの中でこそ、消される声・風化して行く記憶を掴むことが出来る。そう思います。

東北ヘルプは、「日本アルベルゲ協会」様と協働して、「みちのく潮風トレイル」を歩いています。青森・八戸から福島・相馬の松川浦まで「一筆書き」でコースを設定し、例えば「カリタス南三陸」等のボランティア団体が、その歩道を整備する。環境省が、頑張って、その下支えをしてくれています。



4月は宮城県の南端・山元町の震災遺構「中浜小学校」を出発点として、山元町役場まで到着しました。5月はそこから「復興の鐘」を目指して、4時間くらい、歩きます。ボランティアのご協力を大きく得ておりますから、どなたでも、仙台駅に朝9時に来てくだされば、特にお金も道具も不要です。ご興味のある方は、どうぞ、遠慮なく、東北ヘルプまでご照会ください。ご一緒に歩くことが出来れば、きっと、また新しい発見に恵まれることと思います。

2025年4月25日
東北ヘルプ代表

川上直哉

自然の美しさと、 笑顔に出会う道 みちのく潮風トレイル

東北と
歩いていこう!

東北の新しい道がひられました。

名前は、「みちのく潮風トレイル」と言います。
雄大な太平洋にそって旅をする、
とてもとても長い道です。森と海のどちらの
恵みも感じることができる豊かな道です。

森、里、川、海のつながりから生まれた自然と
そこで紡がれた物語は、
このトレイルだけが持つ美しい魅力。
そしてこの道から人々の暮らしが伝わり、
やがて未来へと続いて行くことを願っています。

道は、人が歩いて道になります。
「みちのく潮風トレイル」も、
東北に住んでいる人と、
東北を訪れる人と、
みんながいっしょになって
歩くことで、道になる。

どうぞ、東北を、この道を歩いてください。
それが東北の復興の歩みとも
重なっていきます。

みちのく潮風トレイル
Michinoku Coastal Trail



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍西日本連隊長）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は全て 2023 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を通して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com

携帯電話 090-1373-3652